

# まだ見ぬ鈔本『論語義疏』(二)

影 山 輝 國

今回は行方不明の有為齋本、皎亭本、文之本の三種を挙げた。これらは昭和初期までは所在があきらかであったが戦後に行方がわからなくなったものである。

今回は幕末から明治にかけて存在し、『経籍訪古志』<sup>(一)</sup>に著録されている「求古楼蔵本」と「容安書院蔵本」とについて述べる。

論語義疏十卷 旧鈔本 求古楼蔵

梁国子助教呉郡皇侃撰、此書今有刻本、乃係寛延中根本伯修倣邢昺疏例改換体式、不足拠也、此本真為皇氏原本、旧為吉篁墩蔵本、考異所引義疏指此也、今帰求古楼、

(梁国子助教呉郡皇侃撰、此の書 今刻本有り、乃<sup>すなは</sup>ち

寛延中 根本伯修 邢昺<sup>けいへい</sup>疏の例に倣<sup>な</sup>ひて体式を改換するに係る、拠るに足らず、此の本は真に皇氏の原本<sup>た</sup>為り、旧吉篁墩の蔵本為り、考異に引く所の義疏は此れを指す、今求古楼に帰す、

まず、狩谷棧斎(一七七五—一八三五)の求古楼蔵本についてであるが、不思議なことにこの本は卷子本なのか、冊子なのか記されていない。『経籍訪古志』は、書名、巻数の下に、いちいち「旧鈔卷子本」、「旧鈔卷子改摺本」、「元槧本」、「朝鮮国活字刊本」等々と明示し、線装本ならば「每半面幾行、行幾字」と書くのが普通である。求古楼蔵本は「旧鈔本」であるとは言っているが、どのような形態の本なのかまったくわからない。また「此の本は真に皇

氏の原本<sup>た</sup>為り」と記されているが、これは根本氏が「体式を改換」する前の体式の鈔本であることを意味しているもので、日本に初めて伝わった祖本、あるいは『日本国見在書目録』に著録された『論語義疏』十卷そのものであるという意味では決してあるまい。また、あまりに簡略すぎる書誌は、この記事を書いた者が、この本を実際に見ていなかったのではないかという疑念さえ抱かせる<sup>(三)</sup>。

この『論語義疏』は吉田篁墩（一七四五—一七九八）が『論語集解攷異』十巻を著したときに校勘に用いた本の一つである。ただ、篁墩が寛政三（一七九一）年四月に記した「聚珍版刷印旧本論語集解並攷異提要」を見ても、「義疏用旧鈔本」とあるのみで詳しいことはわからない。

この書がいつ狩谷掖斎の手に渡ったのかも未詳である。篁墩は寛政十年九月一日に死去したが、その年、掖斎は二十四歳であった。

掖斎は文化十二（一八一五）年五月七日から翌年閏八月中に至るまで、蔵書家たちの珍書を求古楼に集め、合計十一回の古書展覧を行っている。第六回は文化十二年十月十日、求古楼展覧第六集として開催された。掖斎四十一歳の時である。この時、福山藩所蔵の古鈔『論語義疏』が出陳された。この古鈔『論語義疏』がいかなるものかは未調査であるが、このとき掖斎は篁墩本を並べて展示した形跡は

ない。出陳した書籍の記録の所在が不明な第八集、第十集、第十一集を除き、他の展覧のときも『論語義疏』が展覧された記事はない。

森鷗外は『伊沢蘭軒』<sup>(四)</sup>の中で、

蘭軒は京に往く狩谷掖斎に書を買ふことを託したので、掖斎は此辛巳四月十四日の簡牘の末に訪書<sup>たづね</sup>の消息を語つてゐる。蘭軒のあつらへた書は一切経音義、論語義疏及黄帝内経であつたらしい。（その百十七）

と記し、一切経音義について知見を述べた後、

論語義疏と内経との事は省略に従ふこととした。掖斎の書牘には単に「義疏」と云つてある。それを皇侃の論語義疏と解するのは、嘗て寛延版が邢昺本に仿つて変改してあるのに嫌ぬため、当時の学者は古鈔本を捜すことになつてゐたからである。（その百十八）

という。辛巳とは文政四（一八二二）年、掖斎四十七歳の時である。四月十四日附けの蘭軒宛て簡牘には「一切経音義は頼申候。義疏と内経はいまだ見当り不申候。」と書かれている。この「義疏」が鷗外のいうごとく『論語義疏』古鈔本であるならば、この時すでに篁墩の旧鈔本は掖斎の手に入つていたと思われる。自分も持っていない旧鈔本をわざわざ他人のために探し回ることはいらないだろうし、蘭軒は掖斎の持つている旧鈔本を自分も欲しいと思ひ購入を

依頼したのではないかと思えるのである。<sup>(六)</sup> 前所有者の簞墩没後二十三年である。

さて、求古楼の蔵書は椽斎の死んだ翌年の天保七（一八三六）年十二月、早くも売却されることになった。その間の事情は『懽堂日曆』<sup>(七)</sup>に詳しい。

二十四日 晴。小島子「成斎―引用者注」来り、求古楼（狩谷椽斎）の買書を諒ぐ。これが為めに寝ねずして曉に徹す。（後略）

二十五日 晴。強いて起き、山本頤庵氏に赴いて謀り、遂に求古楼に入り阿高「椽斎二女たか―引用者注」に面すれば、すなわち小島の議と小異す。主人「椽斎の嗣子長男懷之―引用者注」は宋元の秘帙を留め、明板以後および本朝の図籍を売らんと欲す。わずかに三百金<sup>も</sup>を須う。（中略）高云う、明日を以て目錄を送らんとす。（後略）

二十六日 晴。（中略）目錄は終にいたらず。夜に入って懊悵<sup>おうちよう</sup>す。

二十七日 陰。伊沢長安子は書目を持ち来り、求古楼の売書の事を謀る。石窓「海野氏―引用者注」もまた来り、ともに書目を閲し、頗る意に満たず。もし漢器鏡を以てこれに加うれば、或いはゆるすべし。（中略）夜、伊沢は書を以て報ず、求古の後人は双魚洗・

三耳壺・威斗・漢鏡（六七面）を以て三百金を求め、書目に具するところを以て二百金を求むと。この漢器（三）・漢鏡（四）及び漢錢（五）は椽翁<sup>えん</sup>が六漢老人と号するところなり。書直（漢十三貫七百四十匁、和四貫三十四匁、通計二百九十六匁）。

二十八日 雪やまず。（中略）入りて相公「太田資始<sup>すけ</sup>」に謁し、前件を以て寛説<sup>かんせつ</sup>すること極めて切なれども、歳荒にて用を節するを以て拒まる。すなわち出でて頤庵に就いて謀れば、蒞庭君<sup>しやうてい</sup>「多紀氏」はすでに一書を以てこの事を告ぐ。因って出て蒞庭に就いて謀り、人定<sup>じんてい</sup>「午後八時」に辞去して頤庵に宿す。

二十九日 晴。早起し、粥おわり、相府「太田侯」に赴けば、蒞庭来り謁入することすでに久し。相公は公事を以て辞し、牧野用人をして細問せしむ。拒まれること昨日のごとし。因って書を作つて長安に報ずるに諧<sup>かな</sup>わざるの状を以てし、且つ蒞庭に就いて謀らしむ。蒞庭は多く賢豪を知る、懇求すれば必ず遇うところあらん。ああ四日の憂苦はすべて画餅<sup>がへい</sup>となる、嘆ずべし、嘆ずべし。（後略）

これによれば、懷之の意を受けた懽堂が苦心して老中掛川藩主太田資始に売ろうとしたが、不首尾であったことが分かる。

翌、天保八（一八三七）年、求古楼の蔵書は太田資始の政敵であつた老中浜松藩主水野忠邦がその優品を買い取ることになる。以下も『憊堂日曆』からである。

正月二十七日 陰、寒。（中略）昏刻、文蔚（憊堂の生徒、若月氏一引用者注）還り、小島の語を伝えて云う、求古（狩谷掖斎）の珍書は遂に売らんとす、近日来たり商量すと。嘆ずべし、嘆ずべし。

三月十七日 早晴。（中略）道純（浜江拙斎一引用者注）・長安を別室に延いて、藤軒（水野忠邦家臣、小田切氏一引用者注）とともに求古楼の漢器・書卷の事を議す。議定まり、遂に藤軒をして直ちに長安に約せしむ。この事は今より余に属せざるなり。（後略）

五月晦 晴、熱。藤軒（小田切藤軒）来り、その君（水野忠邦）の意を以て、求古（狩谷掖斎）の古書の絶勝なるものを物色す（孝経・論語・古仏語・古書画類）。（後略）

物色された中の論語に『論語義疏』が含まれていた可能性もある。水野忠邦の蔵書となつた後の、求古楼の蔵書の行方は未調査である。

又旧鈔本 容安書院蔵

每半面九行、行二十字、注文双行、此本字体奇古、当

是応永間鈔本、旧為市野光彦蔵、今帰容安書院、

光彦手跋曰、古鈔本論語義疏十卷、審其筆跡係於応永前後之謄写也、寛延中根本伯修刻義疏、倣邢昺本而変乱旧章、亦可痛惜矣、此後人所為也、削而去之則皇氏之旧可復矣、予欲從事于謄写老而不能書、以告世之善讀者、文化十四年歲次丁丑夏六月望日江戸市野光彦謹識、

六朝經書其伝者世無幾、但有義疏一通、李充繆播等十三家之經說、依此而僅伝、若無此書則何由得伺魏晉之經学焉、辛丑二月廿日迷庵再識、

（每半面九行、行二十字、注文双行、此の本字体奇古、当に是れ応永間の鈔本なるべし、旧市野光彦の蔵為り、今容安書院に帰す、

光彦手跋に曰く、古鈔本論語義疏十卷、其の筆跡を審らかにするに応永前後の謄写に係る、寛延中 根本伯修義疏を刻す、邢昺本に倣ひて旧章を變乱す、亦た痛惜すべし、此れ後人の為す所なり、削りて之を去らば則ち皇氏の旧復すべし、予 謄写に従事せんと欲するも老いて書す能はず、以て世の善く読む者に告ぐ、文化十四年歲次丁丑夏六月望日 江戸市野光彦謹識、

六朝の經書 其の伝はるもの世に幾も無し、但義疏一通有り、李充・繆播等十三家の經說、此れに依りて僅

に伝ふ、若し此の書無くば則ち何に由りて魏晉の經學を伺ふことを得ん、辛丑二月廿日 迷庵再識、)

次に、容安書院藏本であるが、「每半面九行、行二十字、注文双行」とあるので線装本であると思われる。「注文双行」とあるのは、現在目睹しうる多くの旧鈔本の実態から考えて、何晏の注が双行に記されているのではなく皇侃の疏が双行になっているという意であろう。

市野迷庵（一七六五—一八二六）の手跋に「其の筆跡を審らかにするに応永前後の謄写に係る」とある。この書は迷庵が『正平本論語札記』一卷を書く際に、校勘に用いたものであり、文化十（一八一三）年十月に記した『札記』前文では「古鈔本（慶長以上古鈔。光彦藏本）」と述べ、本文中では「古鈔皇本作某」などとあることから、実際の校勘に使用されていたことが裏付けられる。

この鈔本がいつ渋江抽斎の藏本になったのかも定かではない。<sup>(九)</sup>迷庵は文政九年八月十四日に他界しているが、このとき抽斎は二十二歳であった。迷庵の最初の識語は文化十四（一八一七）年、再識は辛丑に書かれていることになっているが、文化十四年以後最初の辛丑は天保十二（一八四一）年で迷庵易簣の十五年後になってしまふ。おそらく辛丑は辛巳すなわち文政四（一八二一）年の誤りであろう。

この時までには確かに迷庵の所藏であつた。

抽斎の容安書院に収められた『論語義疏』はその後どうなつたのであろうか。抽斎の嗣子七男の保が書いた「抽斎歿後」の明治八（一八七五）年の記事に「両掛一件の附録書籍の事」という項目がある。

渋江家の書籍ハ兎角失はるべき運命を持つて居たと見える 初め優善（抽斎の二男、矢島氏の養子となり、養父の称を襲つて玄碩とも云つた―引用者注）がマダ少年の時 土藏へ行きてハ懷と背中と両袖とを一杯にして持ち去つた。ソレを恒善（抽斎の長男―引用者注）が見附けると「玄純（優善の小字）一寸御待チ」と呼び掛け捉まへて取返してハ散々に小言をいつたそうだ それでも人目をしので持出し 又、二階の書物などハ縄でからげて二階の屋根から卸すと下にハ予て同類が待て居て取去つたそうだ ○抽斎ハ丙辰、丁巳、戊午と三年つゞけて丁巳の時にも既に親戚知友門人が集つて「死亡の書翰」を書たそうだ 此の病氣の時にも優善が来てハ枕辺の書籍を持ち去るので 父ハ母に幾度となく「玄碩が来た様子だから注意せよ」といつた 父の歿後ハ益す甚しかつた。それに枳園父子〔森立之、約之父子―引用者注〕が交々借りて行きてハそれ限りになつたのが多かつた 私が幼時日々伝經

廬（海保の塾）へ通学したが、折節竹逕先生から「当節ハ矢島さん〔優善―引用者注〕ハドチらに御出ですか、養竹〔森立之―引用者注〕が御伺ひを致しハしませんか」と尋ねその都度「だいぶ御藏書が本屋に見えるやうです」と忠告した（中略）

○その年に矢島と別れて亀沢町へ引移ったが、予て三万五千部と聞て居た藏書ハわづか一万弱となつて居た

○それから後ハ、枳園父子が交々来て借用を申込んだ、母ハ拒絶した、併し借用証を入れて借りて行つた、それハ只の一冊も帰て来ない、現今写本の端本が手元に多いのはそれ故である、○小島成斎の忠告の下に書籍を大半伊沢磐安〔柏軒―引用者注〕に預けることにした、併しわづか一年許経過した後、伊沢ハ来て

「今度將軍家の御供で上洛せねばならぬ、留守中、家人ハ仔細ハないが塾生が多人数居るから御受合が出来ぬ、情願引取つて呉れよ」といつた、抛なく取り戻して比良野〔弘前藩留守居比良野貞固―引用者注〕に話して君侯の土藏へ預け、毎歳二回、比良野の二階で虫干をすることにした、併し目録を作つて見ると僅に三千五百部余であつた、○驚いた事にハ、私が研学の際、求古閣本の十三経や二十一史ハ勿論八尾版の史記でも論語義疏でも、甚しきハ十八史略、元明史略の類ま

で皆新に買求めねばならなんだ

最後に出てくる『論語義疏』が旧鈔本を指しているのかどうかははっきりしないが、いずれにしても明治八年には容安書院藏本は所在不明となつていた。

（待統）

## 注

（一）『解題叢書』（広谷国書刊行会、大正十四年十月）所収による。『経籍訪古志』は初稿本、二稿本、三稿本のほか種々ある。詳しくは長澤規矩也「『経籍訪古志』考」（『長澤規矩也著作集』第二卷、汲古書院、昭和五十七年十一月）を参照されたい。

（二）川瀬一馬は「即ち、訪古志編纂当時には既に求古楼等の善本が殆ど散佚してしまつた為、編目の際、実物を再調する事が出来なかつたので、本書（求古楼展観書目―引用者注）の如き文献を用ひて起稿したものと思はれる。」と述べている。（『安田文庫書目』自筆本の部（其の二）狩谷校斎の部、求古楼展観書目第二『椎園』第一輯、昭和十二年一月）

（三）梅谷文夫著『狩谷校斎年譜』（下）（『日本書誌学大系』92（2）青裳堂書店、平成一八年二月）による。

（四）『鷗外全集』第十七卷、伊沢蘭軒（岩波書店、一九八八年

四月)による。

(五) 注(三)。

(六) 静嘉堂文庫に伊沢蘭軒旧蔵の『論語義疏』鈔本一冊(巻

二)が伝わるが、その来歴は明らかでない。

(七) 山田琢訳注『懔堂日暦』5 (東洋文庫377 平凡社

一九八〇年五月)による。松崎懔堂の自筆原本は静嘉堂文庫に所蔵される。確認したところ原文は漢文であるが、文字の異同はなかった。

(八) 同じく応永年間(一三九四—一四二八)の鈔本とされているものに、尊経閣文庫蔵本がある。十巻本で、每半面九行、行二十字、疏文双行であることも同じである。尊経閣文庫蔵本は第四巻末に「応永三十四年八月誌之」と書かれているところから「応永本」と呼ばれている。

(九) 国立国会図書館に渋江抽斎自筆の迷庵蔵書目録たる「青婦書屋儲蔵目録」がある。それには「論語義疏十巻 梁皇侃撰応永已前旧抄」と著録され、上部に○印(抽斎ノ蔵ニ婦スル印)が付けられている。これがいつ書かれ、○印がいつ付けられたかは未詳。

(十) 松本明知編『森鷗外「渋江抽斎」基本資料』(岩波ブックサービスセンター製作 一九八八年六月)による。原本は東京大学総合図書館に所蔵され、鷗外文庫 書入本画像データベースでも閲覧することができる。

(かげやま てるくに・実践女子大学教授)